

や横穴墓からなる群集墳を営むようになる。京築地域では荏田町法正寺地区から行橋市椿市地区や、勝山町黒田地区、御所ヶ谷から馬ヶ岳北麓、行橋市東部の観山、豊津町節丸地区などに集中し、行橋市・京都郡内だけでも二〇〇〇基を超えると推定される。时期的には五世紀代後半から築造が始まり、七世紀初頭には新たな古墳の築造は減少する。行橋市渡築紫遺跡(第51図)や椎田町石堂中後ヶ谷遺跡などでは七世紀後半まで築造されている。

二 集落の変遷

前期の集落

古墳時代初期の集落は、弥生時代後期後半の集落から継続して営まれているものが多い。下稗田遺跡では弥生時代後期中ごろから古墳時代前期初頭の集落が、標高三〇メートル前後の丘陵部に営まれており、住居跡七七軒が調査されている。このうち、弥生時代後期最終末から古墳時代初頭に属する住居跡は四軒ほど確認されている。荏田町葛川遺跡や行橋市矢留遺跡などでもほぼ同時期の集落が調査されているが、集落の立地環境や住居の規模・構造は類似している。これに対して、荏田町木ノ坪遺跡の集落の場合、沖積平野奥の周囲の水田面とはほとんど標高差がない微高地縁辺部に立地する点が異なっている。この種の集落は築城町十双遺跡でも三軒が確認されている。

この時期の集落に共通する特徴は、弥生時代後期から連続して営まれ、古墳時代前期中葉には消滅していることである。住居の構造は、平面形がやや長方形で、規模は一辺が四〜六メートル前後である。主柱穴は四本

または六本で、中央部に炉跡、壁際にベッド状遺構、一辺の壁際中央部に貯蔵用の穴を持つ。

前期後半の竪穴住居跡や集落の調査例はごく少ないが、豊前市上大西遺跡では前期の竪穴住居跡二軒が調査されている。SB004は三・五×三・四メートルのほぼ正方形の平面形をなし、主柱穴は二本で、床面の円形土壇から出土した土師器の甕は、前期でもやや新しい傾向を示す。また、行橋市内屋敷遺跡B地区1号住居跡は四・六八×三・〇四メートルの長方形の平面形をなし、前期後半から中期前半の高杯を出土している。

中期の集落

前期後半から続く集落の衰退傾向は、中期後半でも同様の状況にある。犀川町タカデ遺跡は五世紀前半から七世紀前半までの長期間にわたる集落で、竪穴住居跡が三六軒検出されている。このうち、31号住居跡は当集落で最も古く、床面が五×四・一メートルのやや長方形をなし、中央部に炉跡、短辺の壁際にベッド状遺構、長辺の一方には土壇を設けている。下稗田遺跡でも五世紀前半から七世紀中ごろの集落から竪穴住居跡九八軒が調査されている。このうち、古・I・93号住居跡は五世紀前半に属し、既に屋内にカマドを持っている。これは竪穴住居跡の屋内カマドとしては当地域で最古の例である。

五世紀後半代では、タカデ遺跡で三軒、下稗田遺跡で六軒の竪穴住居跡が確認されており、しだいに集落としての体裁が整いつつある。住居跡の構造は、床面の平面形がほぼ正方形で、主柱穴もほぼ正方形に四本配置されている。依然としてベッド状遺構を設けるものや屋内土壇を持つものがみられ、屋内カマドはまだ少ない。床面の規模は一辺が四〜六メートル前後のものが多く、七メートルを超える特に大型のものはみられない。

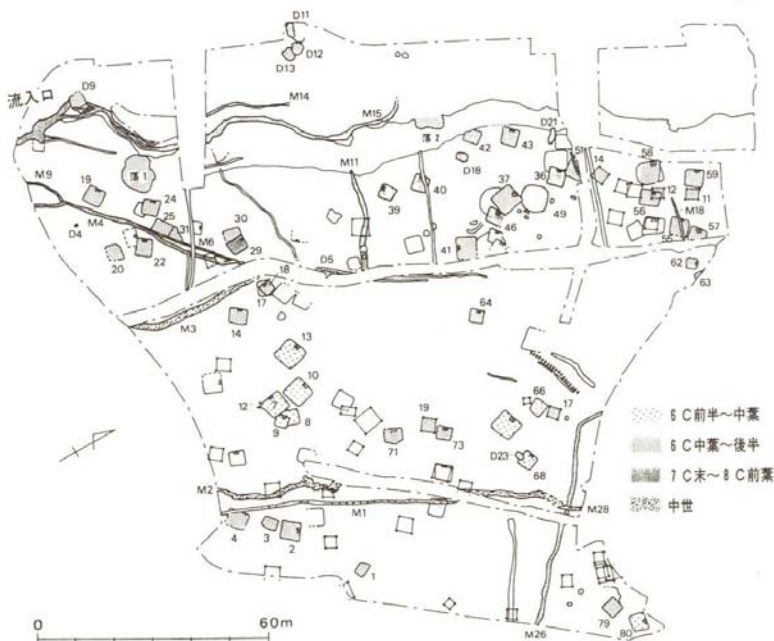
後期の集落

六世紀に入ると生産力の拡大と新しい農地の開発につれて、集落は数・規模の両面で加速度的に膨張する。下稗田遺跡では、前半代の住居跡が一〇軒確認されている。また、この時期

第4章 古墳時代

に新しく誕生した集落には行橋市渡築紫遺跡、築城町安武・深田遺跡（第52図）などがある。安武・深田遺跡では、調査された六六軒のうち九軒の住居跡が前半代に属する。この時期の堅穴住居跡は、ベッド状遺構を持つものはほとんどなく、屋内土壌も非常に少ない。カマドは半数以上の住居跡で検出される。

後半代では集落の増加は、まさに爆発的になる。苅田町谷遺跡・行橋市内屋敷遺跡・豊津町源左エ門屋敷遺跡・築城町安武土井の内遺跡・豊前市荒堀中ノ原遺跡などはこの時期から新たに集落が営まれている。これらの集落は、全体的に数軒程度の小規模であることが特徴となっている。これに対して、下稗田遺跡では二〇軒以上、安武・深田遺跡でも二〇軒弱程度で集落が構成されていた。このよ
うな状況は、地域の核となる大規模集落と、



第52図 築城町安武・深田遺跡古墳時代遺構分布図

新しい農地の開発を目指した前進的な小規模集落とが併存する状況を示している。また、集落内の施設では、この時期に方二間の総柱または方一間の掘立柱建物が増加する。これらの多くは高床倉庫と考えられ、家父長層の富の蓄積を裏付ける施設である。

終末期の集落

中期から後期にかけて継続して営まれていた集落は、七世紀前半代に衰退しいったん姿を消すものが多い。下稗田遺跡・源左工門屋敷遺跡・タカデ遺跡・荒堀中ノ原遺跡などがこの傾向を示す。また、渡築紫遺跡・谷遺跡の集落は七世紀後半まで継続している。安武・深田遺跡の場合、七世紀に入ると大規模集落が突然消滅し、七世紀末から八世紀前葉にかけて再び小規模な集落が営まれている。

一方、七世紀前半代に新しく形成される大規模集落もある。豊津町金築遺跡は遅くとも八世紀後半代に豊前国の行政の中心地である豊前国府が建設される場所に広がる七世紀から八世紀にかけての集落で、住居跡が六五軒確認されたが、発掘調査地区外も含めると一〇〇軒前後に達すると推定される。

当地域ではまだ豪族の居館は発見されていないが、一般集落内では六世紀後半代には下稗田遺跡古・I・47号住居跡、同古・I・52号住居跡のように、一辺の長さが七メートルに達する大型の竪穴住居が現れる。

三 その他の遺跡

当地域の生産関係遺跡としては、須恵器を生産した窯跡や製鉄を行った炉跡が発見されている。